

『奈良朝の政変劇——皇親たちの悲劇』

について

倉本 一 宏 著

私は一九五八年六月に生まれた。奇しくもその年八月、北山茂夫氏の『日本古代政治史の研究』（岩波書店、一九五九年）の「序説 七・八世紀の内乱の歴史的特質」が執筆されている。以来四〇年、その内容や背景にある思想に共鳴するにせよ反発するにせよ、この書は奈良時代政治史研究の世界において、いまだに大きな影響力を保っている。

一方、ほぼ同じ時期に石母田正氏によって記された「政治史の対象について」（『石母田正著作集 第十三巻 歴史学の方法』所収、岩波書店。初出は一九五七年）は、おおよそ政治史研究には四つの部面がある」と指摘している。すなわち、1 国家の統治機構および形態、2 政策、3 政治的事件、4 指導的政治家の研究、である。これらの諸側面を包括し、統一することによって、客観的で新しい政治史叙述のあり方が生まれることになるのであろうが、これら四つの側面のうちでは、「3 政治的事件」に関する研究（「狭義の政治史」とでも言えようか）が、その恣意性（これには単なる思い付きと、一定の「政治的」確信とがあるが）ゆえに、その著作の多さとは裏腹に、これまでもっとも立ち遅れた分野であったと考えられる。

一応「日本古代政治史」を専門分野として標榜している私も、実は

政治的事件に関する叙述は、特に奈良時代に関する限り、これまでほとんど行なったことがないはずである。それは、北山氏の一連の巨大な業績に対する想いと、石母田氏の指摘とが常に念頭から離れることがなく、その狭間に立ちつくしてしまっていたことによるものである。うと、勝手に分析しているのであるが、生後四〇年、また古代政治史研究に関与してから二〇年、職を得てから一〇年を目前にして、ようやく「狭義の政治史」に関わることになってしまった。吉川弘文館から「よりよい二十一世紀社会を築くため」の「人類の遺産・教訓」として刊行されている「歴史文化ライブラリー」の五十三冊目として刊行された本書が、その最初（そして、もしかすると最後）の著作ということになる。

それでは、とりあえず目次を掲げてみよう。下の年号は、それぞれの事件の起こった年を示している。

はじめに—吉野宮の誓盟から—

律令国家の権力構造と皇親

律令国家の権力論

律令制下の皇親

奈良朝前期の政変と皇親

石川嬪所生文武皇子の皇籍剝奪事件

多治比三宅麻呂謀反誣告事件

長屋王の変

塩焼王配流事件

和銅六年〔七二二〕

養老六年〔七二二〕

天平元年〔七二九〕

天平十四年〔七四二〕

安積親王暗殺事件

天平十六年〔七四四〕

奈良朝後期の政変と皇親

橘奈良麻呂の陰謀と橘諸兄事件

天平十七年〔七四五〕→天平勝宝八歳〔七五六〕

道祖王の廃太子

天平宝字元年〔七五七〕

橘奈良麻呂の変

天平宝字元年〔七五七〕

惠美押勝の乱

天平宝字八年〔七六四〕

淳仁天皇の廃位

天平宝字八年〔七六四〕

和氣王の謀反

天平神護元年〔七六五〕

奈良朝末期の政変と皇親

不破内親王巫蠱事件

神護景雲三年〔七六九〕

井上内親王廃后と他戸親王の廃太子

宝龜三年〔七七二〕

氷上川継の謀反

延暦元年〔七八二〕

結語に代えて―奈良朝の政変劇と皇親―

目次を眺めただけで、あまりの悲劇的な内容に暗澹たる気分になってくるが、天平文化の花開いた（とされる）奈良の都の裏側で、幾度となく繰り広げられた政変劇の実体を解明することによって、日本古代国家の権力構造の特質を探ることを目的としたものである。

具体的な内容を説明する余裕はないので、著者の政治認識（のようなもの）をいかほどかでも表わしている叙述を、登場順に並べ立ててみよう。少しでも「奈良朝の政変劇」の雰囲気を感じていただければ、幸いである。

・日本の古代氏族は、新たな皇嗣を擁立することでしか国家に対する反逆を行なうことができず、そのための「玉」として、天武系諸王たちを策謀の場に引き入れた。

・だいたい、古代の支配者層内部において、政治勢力がどのようにして存在していたのか、そもそも政治勢力などと称するに値するものが存在していたのかということも、いまだ本格的に論じられたことはない。

・皇親の立場から、精勤を重ねて昇進し、上級官人となって権力中枢に入り込むことを目指すよりも、四位か五位程度の官人に留まって、血統的尊敬を集めながらも激職に就くことはなるべく厭い、権力の中核からは距離を置いて、王権から危険視されることは絶対に避ける、といった態度が思い浮かぶ。

・彼ら皇親は王権を圍繞して擁護する「藩屏」になどなり得ようはずはなく、逆に律令国家の権力の中核的な部分からは、無能で危険な「前時代の遺物」として認識されていたであろうことは、十分に推察されるところである。

・災異によって政治の得失を判断するという理念は、政治というものものが支配者層の総意と結集、そして妥協に基づいて行なわれるものである以上、えてして独善的な理想主義に陥る危険性を内包している。

・三千代、そして不比等は、安宿媛が皇子を産まない場合のスペアとして、同じ三千代の近親者を皇太子首皇子に配したのであろう。

・長屋王の「左道」を問題にしたい者がいて、それを密告しようと考えてる者が出てくれば、どの事柄が密告の対象になったかにかかわら

ず、「長屋王の変」は起こり得たのである。

・このような「推理」を行なうということは、必ずしも歴史家の任務ではない。

・支配者層というのは、目前の激変をとかく避けたがるものであり、これは、阿倍皇太子を支持しない人々にとっても同様だったはずである。支配者層の大多数が、近い将来の政変が未然に回避できたとして、安積親王の死に対して安堵の想いを抱いたであろうことは、想像に難くない。

・本人の意思とは関わりなく、もっとも高い地位にある者が、もっとも危うい存在なのである。

・奈良麻呂がクーデターの目的として「百姓の望に答へ」ようと言っていることには、われわれはほとんど耳を傾ける必要はない。人民の幸福を願って謀反を起こす支配者など、歴史上ほとんどあり得ないのである。

・諸兄にとつては、聖武こそが最後に継るべき「藁」となったわけである（聖武も同様だったかもしれない）。

・諸兄としてみれば、この時の肆宴に参会している者が自己の派閥の者ばかりだといので、気軽に愚痴の一つも言ってみたのであろうが、それを伴として奈良麻呂邸に連れて行った家司に密告されるなど、以前の長屋王の例とは異なり、家中の者にも見放された諸兄の姿を垣間見ることができる。

・「高位」を望まないという皇親の態度は、「皇位」をも望まないという態度に達したのである。

・それにしても、孝謙に召された「群臣」たちは、この程度の仲麻呂の策謀も見抜けなかったのだろうか。律令国家成立以来例のない、諸卿への皇嗣諮問という形式に幻惑されて、思わず本音を発言してしまい、仲麻呂や孝謙にその心中を見透かされてしまったのである。謀反を起こそうという者にとつて、皇親が単に次期皇位予定者としての「玉」に過ぎず、行動の詳細を相談する相手ではなかったことを窺わせるものである。

・長屋王遺児として一方からは期待され、また一方からは危険視されるという立場は、彼ら兄弟の肩に重くのしかかり、その不安から一刻も早く逃避したいという願望こそが、安宿王も含めた三人を三者三様に動かしていたように思えるのである。

・皇親には、みずから主導的に国家に反する意志ではなく、また一方、皇親に「皇権の藩屏」としての役割があったとするのならば、それは近親の「謀反」を密告することだったとも言うほかはない。福信は額田部宅で酒を飲まされていたはずであったが、実際には宴会は開かれなかったものか、それともよほど酒に強かったのか、謀反人追捕に活躍している。もっとも、敵対派閥の人間にいきなり酒に誘われても、おいそれと飲み惚れているわけにもいくまい。

・首謀者たちは、ほとんど何らの兵力も準備できないまま、密告が行なわれたことに呆然と時を過ごしていたのであろうか。「来るに随ひて」という表現にも、また恩詔でも期待して、のこのこやって来た有様が窺える。

・ここに言う「人民の辛苦」が実質を伴わないことは、これまでと同

じであり、支配者層の間に広範な支持を得ることなどできるはずはない。

・この密告が道鏡の意を承けたものとするならば、その政治的バランス感覚は、なかなかのものである（仏教者として殺人を防ごうとしたのならば、その人間の大きさは、なおさらである）。

・いかなる専制的な権力も、支配者層全体を自己の権力内に組み込むことは不可能であり、大多数を占める保守的な中間派との協調に意を用いなければならないはずである。

・文書行政の象徴である鈴印の奪還に執着するあまり、彼の専権の根源であるはずの生身の天皇（それは生きる神器^{ヒツクリツ}であった）の価値を等閑視してしまったことになる。

・その厭魅というのは、称徳の髪を盗んで、佐保川の鬘髻に入れて行なうという、きわめて不気味なものであったという。すでに出家して剃髪していた称徳の髪を、どこから盗み出したのかは、知る由もないが、それは奈良朝政変劇の暗黒面を象徴する、おどろおどろしい風景である。

・「昨日の忠臣は今日の逆臣」

・川継本人に対する怖れというよりも、百年以上もこの国を支配してきた天武系皇統というものに対する怖れと考えるべきであろう。そして、それを克服することで、桓武は奈良朝と訣別し、新たな王朝を確立しようとしたのかもしれない。その意味では、氷上川継の「謀反」は、まさに「奈良朝の終焉」を象徴する事件であった。

・桓武はヤマトに別れを告げ、新たな都の造営を開始する。しかし、

その都では、また新たな皇親が誕生し、陰謀と怨霊が跳梁跋扈する、新たな政変劇が繰り広げられることとなるのである。

最後に、私が皇親のことを思うとき、いつも念頭にある漢詩を挙げておこう。魏の曹操は、末子の曹植を愛して、長子の曹丕を疎んじ、廃嫡が行なわれようとした。曹丕は、曹操の死後、天子となると（文帝）、報復として曹植をはじめとする弟たちを苛めだした。詩才のあった曹植は、文帝に求められて、有名な「七步詩」を即興で詠じた。

煮豆然豆箕 豆を煮るに豆箕を燃やす

豆在釜中泣 豆は釜中に在りて泣く

本是同根生 本是れ同根に生ず

相煎何太急 相煎ること何ぞ太だ急なる

倉本 一宏著『奈良朝の政変劇―皇親たちの悲劇』

吉川弘文館刊（一九九八年十二月）

四六版 二三八頁

一、七〇〇円

追 本書の校正を熱心に行なってくれた、妻の倉本宜子と本学学生の

瀬戸まゆみ（本書のオビコピ―「血塗られた奈良の都―皇親たちの破滅と没落」の作者でもある）・小沼美佳両君に、この場を借りてお礼申し上げます。